人権作文

昨年度の阿蘇市人権作文集『かけはし』の作品の中から一部を紹介します。

皆さんもぜひ、家族や身近な人との関係を見つめ直し、人権や差別について話し合う機会を持ちましょう。

ありがとう

波野小学校　四年（現五年）
佐藤　大地

（喜んでもらえるかな）ぼくは、少し不安な気持ちで車に乗りました。

今日は、ぼくたち神楽部が、上寿園のたん生会に行く日です。ぼくは、六年生のひろきくんと「しばひき」をすることになっています。会場に入ってみると、思ったより広かったです。でも、ステージは少しせまかったです。（これくらいなら舞えるかな）と思いました。

ろうかには、もうお年寄りの人たちが待っていました。みんな楽しみにしているようでした。にこにこした顔で、

「今日は、ありがとうね。楽しみにしとるけん。」

と言ってくれました。

ご飯を食べて、じゅんびを始めました。

白衣を着て、たびをはきました。なんだかきんちょうしてきました。

いしょうは、じいちゃんが着せてくれました。

「大地君、きめるところはちゃんときめなんよ。」

「足をしっかり上げてまわなん。」

かすみ先生は、

「手をゆっくり上げて、そでをぱっと頭の上にかぶって、毛がさをがぶってから舞い始めなさい。」

と言いました。

ぼくは、

「はい。」

と返事しながら、

「よし。やるぞ。」

と気持ちを強く持ちました。

「大地君、今日はちがう面にするよ。」

と言って、じいちゃんが白い面をつけてくれました。初めてかぶるお面だったので、（ちゃんと見えるかな）と心配になりました。

いよいよ本番の時間が来ました。

ひろきくん、しょうまくん、つばさくんとしばの引き方をたしかめました。

おはやしが始まりました。

つばさくんが、

「さあ、いくぞ。」

と言って出て行きました。

しょうまくんが、

「なんかきんちょうする。」

と言いました。

「うん。きんちょうするね。」

と返事をしました。

かすみ先生の言葉を思い出して、しっかりそでをかぶって、毛がさをがぶりふってから舞い始めました。

舞い始めると、どきどきがやんできました。（おじいちゃんやおばあちゃんたちが喜んでくれるといいな）と思いながら、動きをゆっくり大きく舞いました。

ステージの高さが低かったので、しばは、他の部員の人たちとひきました。

（おじいちゃんやおばあちゃんたちと引きたかったな）と思いましたが、（あぶないからしようがない）と思いました。

そのかわりに、ステージからおりて、おはらいをすることにしました。

しばを持って、おじいちゃんやおばあちゃんたちのところにおりていきました。おはらいをすると、みんなが手を合わせて、ぼくをおがんでくれました。（えっ。なんで）と思いました。

（そうか。みんなはぼくの舞いを神様と思ってくれたんだ）と思いました。みんなが喜んでくれるので、たくさんの人をおはらいしました。

「ありがとう。」

と言ってくれたおばあちゃんは泣いていました。

ぼくの手をぎゅっとにぎりしめたおじいちゃんもいました。おじいちゃんの手はやわらかい手でした。

舞い終わると、おはらいしたしばをプレゼントしました。おばあちゃんが、頭を大きく下げて、

「ありがとう。ありがとう。」

と言ってくれました。みんなが拍手をしてくれました。

ぼくの思っていた以上に喜んでもらえました。すごくうれしかったです。

舞い終わった後も、ぼくの頭の中には、

「ありがとう。」

の言葉が残りました。ぼくは、こんなに人から「ありがとう。」と言われたことはありませんでした。

（ぼくのほうが『ありがとう。』だ）と思いました。

帰るとき、大きな声で、

「ありがとうございました。」

と言いました。次はまたちがう神楽を見せに来ようと思いました。

平成二十一年度
阿蘇市人権作文集「かけはし」より